



オガタマノキ

戦没学徒の清冽な青春の香り

中条 毅

(大学名誉教授・池関西国際産業関係研究所長)

昭和十八年十二月は、全日本の大学生が根こそぎ動員を受け戦場に身を曝した日本の歴史上、忘れてはならない時である。

「みていてごらん、きつと吾々の時代が来る。」故郷の山河に向ってこう言い残して散って行った同期の友たち。オガタマノキには「戦没学徒の清冽な青春」が宿っている。

「自分が確実に死ぬことを予め知らされ、そのことの意味を考える時間を充分に与えられた上で、死に直面するというような体験は正常な状態の人間の耐え得る限界を超えている。」(吉田満著『戦艦大和の最期』)

座禅を組み、哲学・聖典を繙き、遺書を残し、青春も家族も捨て、苛烈な戦線に赴く学徒

の中から「母校同志社大学」の一隅に「出陣の碑と記念樹」を残そうという声が上がった。

京都府立植物園園長から記念樹「オガタマノキ」を推められ、出陣学徒二十人程が、荷馬車で母校まで運び、記念樹と碑が今出川校地に残され、あれから五十三星霜の歴史を経ている。

生き残り組(昭和十九年九月卒業生)は戦後三十五年を経て初めて卒業式をもつことが出来、その時同期の戦没者たちを偲ぶ「オガタマノキと碑」を今度は新しい田辺のキャンパスに建て、母校の発展を祈った。両キャンパスの「オガタマノキ」は母校の歴史を贅えつつも今日の深い混迷の世を静かに見つめている。